

## 新潟を離れて -新たなスタート台に立って-

田村伸夫\*

私は昭和25年1月4日に旧塩沢町で生まれ、18才まで魚沼盆地で暮らし、大学生として22才まで新潟市で暮らしました。大学卒業後、約2年間は本社勤務で東京暮らしでしたが、新潟営業所の開設に伴い昭和49年に新潟市に舞い戻り、そのまま約33年間の時が流れました。おそらく私の体の細胞は新潟の水と米と酒がベースで、これに鮭・イカ・甘エビやフキノトウ・ワラビ・茗荷・野沢菜などが季節による変化をつけながら健康を維持していたと思っています。また、思考方法については表面に出る出ないは別にして北越雪譜的な部分が底流に流れていると思います。

先の4月12日、新潟市を離れ単身で名古屋市に引越してきました。13~14日で荷物の整理もほぼ終わり、15日の日曜日は翌日の初出勤に備えてのんびりと休養していたところ、お昼の12時19分、三重県中部で最大震度5強の地震が発生しました(名古屋市では震度3)。…12:28 新潟の妻より安否確認の電話あり。12:32 弊社三重営業所に電話したが回線混雑のため繋がらず。13:18 名古屋支店長より電話があり、緊急点検の要請が来る可能性が高い、との報告あり。…支店から徒歩数分のところにアパートを借りていたので、13時45分に出社し、関係者との電話連絡対応を行い、これが名古屋支店での初仕事となりました。

また、三重県中部地震より3週間前の3月25日には能登半島地震(最大震度6強)が発生しましたが、この時は転勤の挨拶廻りの途中で富山市の妻の実家におり震度5の揺れを体感しました。義母は88才になりますが、これほど揺れたのは生まれて初めてだと話していました(気象庁によると富山市で震度5を記録したのは1930年以来で77年ぶり)。

平成16年の中越地震の最大震度が7、能登半島地震が6強、三重県中部地震が5強であり、地形・地質条件の差異はありますが、震度が1ランク異なると被災エリアや被災状況に大きな差が出ることを改めて認識しました。

西日本では東海・東南海地震が懸念されています。“あめおとこ雨男”とか“はれおとこ晴れ男”という言葉がありますが“じしんおとこ地震男”という言葉はあるのでしょうか？

震災対応は一人で出来るものではなく組織の力が必要なことは中越地震で身をもって経験しています。地震に限りませんが、リスク管理が私の仕事の一つになることは間違い無いと思っています。

今回の転勤辞令は関西・中部支社長で名古屋支店在勤です。関西・中部支社管内には名古屋・大阪・広島・四国の4支店があり、新潟にいた時に比べると活動範囲が3倍以上に

---

\*サンコーコンサルタント(株)

増えました。移動には新幹線を利用することが多く、名古屋～京都が約40分、京都～大阪が約15分、大阪～広島が約90分と思いのほか速く、上越新幹線と比べると本数も格段に多く、人の移動に対して極めて有効な交通手段だということを実感しています。

こちらに転勤するまでは、高校の修学旅行で京都・大阪・奈良方面に来たのが私の足を踏み入れた本州最西端でした。私にとって大阪以西の近畿地方と中国・四国地方は未踏の地です（九州へは飛行機で仕事に行った経験があります）。北海道・東北・北陸・関東・中部地方は何らかの形で足を踏み入れたことがありますので、全国を踏破するチャンスを得たと思っています。なお、現在の私にとって地図帳と時刻表が必須アイテムとなっています。

5月に広島に行った時に新幹線の車窓より田園風景を見ていて気付いたことがあります。田植えは西に行くほど遅い傾向があるようで、新潟平野ではゴールデンウィークにほぼ終了しますが、名古屋以西でゴールデンウィーク中に田植えを終えているところは殆どないようです。…西日本の太平洋側では積雪寒冷地ほど収穫時期の制限が厳しくないため、田植え時期の条件もゆるいのでしょうか。魚沼盆地の農家の次男坊として育ち、新潟平野で37年間暮らした私にとって、田植えを終えて水を満面に湛えた水田を見ていると心が落ち着きます。

西日本といっても地理・地形条件や歴史・文化により、いろいろなところに違いが見られます（四国は未踏のため情報なし）。…名古屋ではエスカレーターは左側に立って右側を空けるが（東京と同じ）、大阪・京都では右側に立って左側を空ける。名古屋は赤味噌、京都は白味噌。お好み焼きの大阪焼きと広島焼き。地下鉄は名古屋・京都・大阪にあるが広島にはなし（路面電車）。京都の街は大阪に比べると時間がゆっくりと流れている（ように感じる）。…等々、私には新鮮に感じられることばかりです。

約33年間の新潟勤務の中には多くの印象に残る現場がありますが（トンネルの現場が多い）、最も印象的なものはやはり中越地震とその対応です。…まず社員とその家族や協力会社・アルバイトの安否確認から始まり、緊急点検対応と調査人員の確保、現地調査と査定資料作成等、平成16年度の年度末までは異常事態の中での業務対応でしたが、今考えると得がたい経験であり明確な言葉では言い表せませんが多くの大事なことを学んだ気がします。

私にとって平成18年度は区切りの年でもありました。…中越大震災の復旧工事がほぼ終了し、新潟県長岡地域振興局と湯沢砂防事務所より感謝状を戴いたこと。初動調査から対策工詳細設計まで弊社が担当した妙見崩壊箇所が年度末に無事開通式を迎えたこと。大学時代の恩師で仲人でもある青木滋先生が亡くなられたこと。尊敬していた弊社顧問の増田芳太郎氏が年度末で退職したこと。下の娘が高校を卒業したこと（とりあえず18才になれば自分の責任と判断で行動ができると思う）。…私の心の中では多くのことに結果が出た（ピリオドが打たれた）年でした。このような状況下での転勤話であり、土地勘の殆どない

西日本地区での勤務となりますが、新しいスタート台に立つことにあまり違和感を覚えませんでした。むしろ、新潟の33年間で培ってきたものを会社の将来に少しでも役立てるのであれば、という想いのほうが強く、この歳になって新たなスタート台に立てる機会を与えられたことにある種の（50年前の小学校の入学式で感じたような）心地良い緊張感を覚えます。

私は新潟県人であり、新潟県人としての誇りを持っています。いまさら新潟県人を辞めることも出来ないし、辞めるつもりもありません。私は私なりのやり方で…健康第一で、地に足を着けて、誠実に、一步一步前に進んで行こうと思っています。

新潟応用地質研究会では再々発足した昭和61年より約20年間、幹事および副幹事長として参加させて戴きました。これまでの皆様の御協力・御厚情に感謝いたしますとともに、これからの新潟応用地質研究会の益々の御発展を祈念しています。長い間本当に有難うございました。

新潟に帰ったときは本町の「蔵」で乾杯しましょう。